

## 障害のある方にとっての避難は困難

小松崎 栄

私は現在、相談支援専門員として障害のある方の相談支援に携わっています。2011年の東日本大震災の際には、きょうされん(旧称:共同作業所全国連絡会)という障害者団体の福井支部からの派遣という形で、福島県南相馬市の障害者訪問活動に参加しました。そのときの経験をお話しさせていただきたいと思います。

2011年4月29日に福井を出発し、夕方には郡山市の「JDF(日本障害フォーラム)被災しょうがい者支援センターふくしま」に到着しました。まずここで震災後の経過の説明を受けました。JDFでは、東日本大震災直後から障害者の安否確認や物資を届ける支援に取り組んできました。しかし、避難先となるべき地域の避難所に障害者の姿はなく、いったいどこに避難しているのかまったく把握できない状況ということでした。この時、南相馬市は東京電力福島第一原発の事故を受け、市の南部は立ち入り禁止区域、中心部は緊急時避難準備区域となっていました。また、飯舘村に隣接する付近は計画的避難区域、一方で北部の鹿島区付近は原発から半径30km外で制限は設けられていませんでした。同じ市内でもこうした複雑な条件の中で、障害ある方たちの安否確認を行ない、まだ予断を許さない原発にもし何かあった時の避難方法を確認するために、個別の訪問活動が開始されたのです。そこには南相馬市長による、障害者手帳所持者の名簿の開示という判断がありました。

4月30日には南相馬市に入り、他県から派遣されたチームと合流。二人一組となって一日に10件を越える訪問を行ないました。65歳以下の障害ある方が訪問対象でしたが、身体障害者手帳の所持者となると、心臓や腎臓などの内部障害の方も対象となります。すぐに医療はほとんど機能していないということがわかりました。原発事故による避難のため、南相馬市内で人工透析を行っていた病院は閉鎖になり、透析を必要とする人は県内、県外を何か所も回って病院を見つけなければならなかったと伺いました。市内には人工透析を再開している病院はなく、まだ戻れないが、ゴールデンウィークの休み中に家に荷物を取りに来たのだ、と話されていました。小児科もまだ診療を再開している所はなく、別の方は、こどもさんのてんかん発作の薬を出してもらうのも困難だとおっしゃっていました。

市民病院もやっと一部外来が始まった所でしたが、市内全域で入院病床は10床しか確保されていない状態でした。本来的には緊急時避難準備区域内にはこどもや高齢者、病人、障害者などはいてはならず、生活していないという前提のため、建前上は病院も学校も施設も開所できません。しかし、現実には、病気や

障害がある要援護者が家族内にいたら、避難はそう簡単なことではなく、避難できずに残っているのは、むしろこうした病院や施設を必要としている人たちでした。

視覚障害の母と自閉症の弟がおり、とても自宅以外では生活できないと話す方。ご夫婦で視覚障害がある方たちは、南相馬市が原発避難のために用意したバスの乗り場まで行けなかったと話されていました。物流も止まり、食料品などの物資も底をつく中でやっと生き延びていたとのことでした。また、「何があっても自分たちの責任でここに残ります。こだわりが強く、パニックを起こしたり、奇声を上げたりするので、避難所で生活するなんて無理ですから。」と話す障害ある方のご両親。寝たきりのお年寄りと障害のある方が家族内にいる方、常時酸素吸入をしているため、自宅以外での生活やバスでの避難は困難なこともさんなど…。いったんは避難したけれども避難所にベッドがなく、ずっと車いすで過ごしたという方もいました。ぎりぎりの均衡を保って生活を成り立たせていた方たちは、その均衡を崩すことが命とりになります。

復旧や復興に向けて他の被災地が動き出そうとしている時に、南相馬市ではまだまったく先が見えていませんでした。「〇〇さんは新潟に行ったよ。」「岡山の子息さんが迎えにきたみたいだよ。」と、訪問先で隣近所の方が行き先を教えてくださいることも多くありました。見通しが立たない中で、隣近所もバラバラになっていくのどと感じました。「弟二人は新潟の小学校へ、上の子はこっちの高校に通ってる。お父さんは透析があるから戻ってこれないし。」と家族がバラバラになって暮らしているケースもめずらしくありませんでした。

よくお年寄りが環境の変化で体調を崩されると聞きます。障害のある方も環境変化には敏感です。いつもと違う場所、いつもと違う人たち、いつもと違う日課…、普段の小さな変化でも不安定になったり、体調を崩したりする方が、私の勤務する施設にもたくさんいらっしゃいます。障害によって特性はありますが、どこに何があるかわかる動きやすい空間で、慣れた家族や仲間たちと、見通しがあって生活する、そんないつもと変わらない毎日が何より大事なのです。言語での表現が難しい方はなおさらです。使えないトイレ、動けない段差、騒がしい空間、休息場所がない…、見知らぬたくさんの人、何が起こるのかよくわからない不安…このような中であっては心身両面に渡ってストレスにさらされます。障害によって、様々な状況を整理し理解するということが苦手な方にとっては、このストレスは我々の比ではないと思います。

震災、そして原発事故後、私が見た逃げられなかった人々は、簡単に環境を変えることが困難な障害者や高齢者でした。原発に近い地域では追い打ちのように医療機関が閉じ、サービス提供事業所が閉じ、最も支援を必要とする人たちが取り残されることになりました。震災は自然災害です。食い止めようとしても避けられないこともあります。しかし原発の事故は自然災害ではありません。しか

もそれまでの日常を元に戻すことができなくなってしまう。障害のある方にとって日常の中で生活することがどれだけ大切なことか。いざ何かあった時には、最も過酷な状況に置かれるのは誰なのか。私は南相馬市でその現実を見てきました。

昨春まで、常盤自動車道は途中に通行不能区間がありました。現在は全線開通して仙台まで行けるようになっていました。昨年末に帰省した折、ずっと気になっていた浜通りへと行ってみました。実家のある水戸から広野まで行き、更に一般道で檜葉、大熊、双葉、浪江へと北上しました。高速道路の両側には放射線量が電光掲示板で表示されています。最大は  $4.2\mu\text{Sv/h}$  (!)。一般道(6号線)の側道は「帰還困難区域」の看板と閉鎖のためのバリケード。信号だけ点滅している様は震災後の南相馬市と変わりません。震災当時のままの建物が残り、そうか、ここは5年近く経ってもそのままなのだと愕然としました。何も進んでいないし、終わっていません。放射性廃棄物を入れた黒袋が並ぶ田んぼ。人が入っていけない場所になってしまったのだと思います。

震災から1年経った頃、親戚の葬儀で仙台を訪れる機会がありました。空港からは遠くで重機が動くのが見え、電車からは大規模な仮設住宅が見えました。それでも海岸線を走る仙石線は途中まで復旧していましたし、街中は何ごともなかったかのようににぎわいでした。そして昨年末に訪れた福島。そこは5年という年月が止まったままでした。この差に愕然とし、原発事故の怖さを再認識しました。原発事故の被災地と他の被災地との決定的な違いは、「次へ進めない」、「同じ土地に戻ることをすらできない」ことなのだろうと思います。5年前に訪問したご家族が、今どうやって暮らしているのかがとても気になります。

いざ原発の事故が起きた時に、車いすの方はまず避難用の一般のバスには乗れません。知的障害のある方、精神障害のある方の中には大勢の人の中で過ごすことが苦手な方が多くいらっしゃいます。こだわりが強い方は自宅や慣れた場所以外で過ごすことは非常に困難です。寝たきりの方はバギーごと避難できるのでしょうか。行った先で人工呼吸器や吸引機の電源が確保できるのでしょうか。障害のある方にとって、日常生活を失うことは健康、命に直結する問題です。

南相馬市で私が見たのは、まさに取り残された人々でした。いざ原発事故が起きたら、取り残されるのは障害者、高齢者です。逃げられない人がいるとわかっていながらまた原発を動かすのでしょうか。3.11以降、絶対に原発事故は起こらない、などということはありませんと明白になりました。福島よりも原発が密集するこの福井県はでもし事故が起きたら、障害者、高齢者のいのちは本当に守られるのでしょうか。私たち、とりわけ障害のある人たちは原発事故前の福島よりももっともっと危険な場所に暮らしているのです。

どうか、原発を動かすようなことはやめてください。